



モンゴル旅行記

H・M

この旅行は、モンゴル語教室に通っているのに、モンゴル語をほとんど話せない私が、無謀にも、モンゴルに行きたいという思いから始まりました。しかも、モンゴルは肉食文化なのに私はベジタリアンという、モンゴルに行くための、クリアしなければならない問題もありました。

今年6月初めに、ものすごく久しぶりに、モンゴル語教室に行った際に、アリウナ先生から、7月15日から8月25日まで、夏休みでモンゴルに帰るという話を聞き、私の中で何かスイッチが入ったように、『モンゴルに行く。』という思いが、どんどん募ってきました。

がしかし。その後の話で、アリウナ先生のご実家は、正確にはモンゴルではなく、モンゴルの少し上に位置する、ロシアのウランウデというところにあることがわかり、ロシアに入国する場合は、ビザを取得するために紹介状が必要だとかで、何だか面倒くさそう。

どうしよう、困った...と思っていたら、アリウナ先生から、先生のお知り合いの旅行会社を紹介していただき、早速出向いて、長時間にわたって色々な旅行プランを聞くも、なにせ一人旅なので、ホテルや車の手配など、全てが割高で予算オーバー。

モンゴルに行くという当初の気持ちが、だんだんしぼみそうになってきた頃、アリウナ先生から、ガナ先生が夏休みでモンゴルに帰ることになり、私の旅行中の通訳や、ホテルや車の手配を全て引き受けてくださるというメールをいただき、やっと今回の旅行が実現できる運びとなったのです。

早速、ガナ先生が日本にいらっしゃる間に、2度ほどお会いして、旅行中の食事のこと、行ってみたい所や、やってみたいことの希望を聞いていただき、旅行の際の携行品のアドバイスを受けてたりと...、どんどん、モンゴルに行く夢が現実に近づいている実感がありました。

ガナ先生がにっこり笑って、「大丈夫ですよ～。任せてください。」とおっしゃってくださり、なんと心強かったことか....。

前置きが長くなりましたが、こうして、8月19日の夜、いよいよ日本出国。

飛行機の出発時間は20時30分でしたが、実際には30分遅れ。日本時間で22時30分頃、夕食として、しっかり機内食が出たのには驚き、パワフルなモンゴルという国を予感しました。

到着は定刻の午前1時。入国審査を済ませ、到着出口で、ガナ先生がお迎えに来てくださっていて、ほっと一安心。そして、ガナ先生のお隣りには、にこやかにほほ笑む男性が...、ガナ先生のご主人でした。深夜の時間だったので、空港の送迎のみ、ご主人が買って出てくださいったのかと思ったら、旅行中のドライバーを全て引き受けてくださり、感謝です。

空港からフラワーホテルに向かう車中で、ガナ先生が、ウランバートル市内の要所を説明していただきましたが、何せ、まだ右も左もわからない状態。ただただ『モンゴルに来た。』という実感が、自分の中でわいてきておりました。

8月20日の朝、ホテルで朝食を済ませ、チェックアウト、テレルジに向けて出発。途中、ジュースや食材を購入して、ウランバートル市内を出ると、右も左も草原。車窓から、遠くにゲルや羊の群れが点在している風景を眺めながら、ドライブ。途中、ふたこぶラクダや鷹がいる所で下車。ラクダの鼻に棒が通してあるので、おとなしくしているという事でしたが、観光で人間に慣れているとはいえ、私の想像以上に大きいラクダが数頭、何かにつながれているわけでもなく、放し飼いで地面に座っているのには圧倒されました。

その後の道中、今日と明日宿泊するツェベクマ・ツーリストキャンプに、アリウナ先生も合流するという連絡があり、これからの旅が、さらに楽しくなりそうな予感。

ツーリストキャンプに行く前に、チンギス・ハーン像テーマパークに行き、巨大なチンギス・ハーン騎馬像と資料館を見学。

ガナ先生が、モンゴルのインフラ整備は、金・銀の産出量で決まるとお話をされていましたが、資料館で、モンゴルの昔の展示物を見ながら、圧倒的に金・銀製品が多く、なるほどと思いました。

そして、チンギスハーン像を後にして、ツーリストキャンプに向かう途中、車を路肩にとめて、草原にシートをしき、ウランバートル市内で買った食材やジュースで昼食。こんなピクニック気分を味わったのは、本当に久しぶりで、新鮮でした。

ツーリストキャンプに到着して、車から荷物を運び出しているタイミングで、アリウナ先生ご一家も到着。なんと、アリウナ先生のお母様と、アリウナ先生のお嬢さんの、親子三代でいらっしやいました。

ツェベクマ・ツーリストキャンプは、アリウナ先生の叔母様であり、かつては司馬遼太郎さんがモンゴルを訪れた時の通訳もされたツェベクマさんが創設されたキャンプで、つまり、アリウナ先生のお母様は、ツェベクマさんの御姉妹というわけです。

ツェベクマさんの波乱の人生については、司馬遼太郎さんの「草原の記」に記されていますが、アリウナ先生のお母様も、民族衣装のデールを身にまとい、帽子をかぶられた、そのたたずまいには、その時代をたくましく生き抜いてきた、モンゴル人女性の強さを彷彿とさせるものがありました。

アリウナ先生ご一家と合流後、テレルジの亀石と、その先にある寺院を観光するため、ガナ先生のご主人が運転する車でキャンプを出発。たしか、キャンプを出発した時間が18時すぎだったと思いますが、まだまだ空は明るく、日本とは違う感覚でした。

亀石は、その名の通り、亀の形をしていて、自然に岩が削り取られてできたものというから、自然の力の不思議さを感じ、ちょうど虹も出ていて、思わず何枚も写真にパチリ。

亀石を後にして、その先の寺院では、寺院の建物の天井に、ルーレット盤のようなものがあって、一人一人、回転軸を回して、天井の盤の止まったところの数字が書かれているメッセージ板を、寺院内から探して読むという事でした。

モンゴル語が読めない私は、ガナ先生にメッセージを読んでいただいたところ、『人々と協力してやっていくことが大切』というようなメッセージで、確かに私にとって必要なことだと心に収めました。

20時過ぎにキャンプに戻り、すぐに夕食。

ベジタリアンの私には、動物性のものが全く入っていない食事を用意してくださり、野菜スープは絶品、サラダはフレッシュだし、その他の食事の味付けも抜群で、まさか肉食文化のモンゴルで、ここまでおいしいベジタリアン料理を食べることができるとは、想像もしていませんでした。

この日は、ゲルで、トランプをした後、シャワーを浴びて就寝。

うとうとしながら、遠くに聞こえる獣の遠吠え、近くにはキャンプの番犬の鳴き声が聞こえたり、まさしく、ゲルの外側の、夜のとばりの自然の営みを身近に感じながら、眠りにつきました。

翌8月21日は、朝食後に、ツェベクマさんが晩年過ごされた小屋と、ツェベクマさんと司馬遼太郎さん他が写っている写真の数々を拝見。

貴重な写真の数々が、ベニヤ板の壁に、無造作に展示されていて、なんともったいないことか。アリウナ先生と、今回は、せめて写真の説明文を各写真の下に取り付けたいと意気投合。ベニヤ板も何とかならないものかと思いました。

撮った写真の中に、ツェベクマさんが、小淵恵三氏が内閣総理大臣に就任していた、平成11年11月3日に、日本国天皇から勲五等を授与されている寶冠書があり、モンゴル人でありながら、日本国に多大な貢献をされた女性だったのだと、改めて感動しました。

その後、念願だった乗馬に挑戦。

私が小さい頃、父の勤める会社のグラウンドに小さな馬場があり、会社の運動会で、サラブレッドにほんの少しだけ乗せてもらって、とても楽しかった記憶から何十年も経た今、モンゴル馬に乗れる夢が

果たせて、童心に帰ったような気持ちでした。

馬に乗りながら、アリウナ先生が、かつて、乗馬に熟練しているツーリストグループの通訳をした時に、乗馬が久しぶりなのに、一日中馬に乗ることになり大変だったという、今となっては笑い話を聞きながら、山の急斜面を下りて行ったりと、とても楽しいひと時でした。

そして、その日の午後は、近くの川べりまでドライブして、ゆったりと時間を過ごしました。

アリウナ先生のお母様は、とても読書家で、川べりで、ずっと本を読まれていらっしゃいました。

アリウナ先生と私は、遊牧民の女の子と男の子が、乗馬のアルバイトで川べりまで来ていたので、さらに2回も乗馬にチャレンジできて、楽しいひとときを過ごしました。

そして、ガナ先生とご主人は、さすが馬に乗り慣れていらっしゃって、乗馬姿が様になっていて、とてもかっこ良かったです。

素人目、乗馬が上手な人との違いは何かと思ったところ、まず第一に、乗馬の時の姿勢が違うのかなと思いました。

今回は、もっと上手になるぞー。

ツーリストキャンプに戻り、牛の乳しぼり体験をする予定でしたが、日本で見る光景とは違い、自然の中で、綱もつけずに乳しぼりをしていて、難しそう。まず、子牛に乳を吸わせて、その後、母牛の乳しぼりをする様子を、そばで眺めるだけで終わりました。

その後は、バーベキュー。

ガナ先生のご主人が、具材のカットからこだわり、串の刺し方の指導をご主人から受けつつ、焼く担当は全てご主人が引き受けてくださり、とてもおいしくバーベキューをいただくことができました。

また、この日も、前日と違う野菜スープが出て、その他のベジタリアン料理もおいしく、大満足でした。

翌8月22日、ここでアリウナ先生のお母様とはお別れ、今日は、ガナ先生のお母様とお嬢さんに、お会いする予定。

キャンプで朝食を済ませた後、荷物を車に積み込み、ウランバートル市内に向けて出発。

車窓から見る景色が、右も左も大草原、ゲルと、羊やヤクの群れの風景から一変して、ウランバートル市内に近づくにつれ、車が渋滞して、なかなか進まなくなり、さらに車線が増えると、車線を変える車が急に割り込んできたり、前の車が急に路上駐車したり、私も日本では車の運転をしますが、絶対にウランバートル市内では運転できないと確信しました。(笑)

そして、ガナ先生のご実家到着。ガナ先生のお母様が、礼装、帽子をかぶられて、お招きくださいました。

ガナ先生のお母様からも、モンゴルの歴史とともに、たくましく生きてこられたモンゴル女性の強さを感じました。

そして、目上の方に贈り物を渡すときには、目上の方がお持ちになる布の下に贈り物をくぐらせて、差し上げるというしきたりが、現在もなお生きていて、モンゴルの伝統を少し学んだ感じがしました。

その後、ガナ先生のお母様とお嬢さんも、ご一緒に、2台の車に分乗して、寺院、ザイサン・トルゴイ、モンゴル民族博物館を観光し、夕食も共にすることになりました。

ザイサン・トルゴイでは、何段もの石の階段を登りきった丘の上であり、眼下にウランバートル市内を一望できました。

モンゴル民族博物館では、歴史に詳しいガナ先生が、一つ一つ丁寧に説明してくださり、モンゴル語のわからない私にとっては、本当に有難かったです。

夕食は、ガナ先生と私だけ、一足先に、ルナブランカというベジタリアンレストランに行ったのですが、ツェベクマツーリストキャンプで食べた食事のほうが、ずっとずっと美味しかったです。

そして、その後、別の場所で、皆で夕食を食べ、急いでお土産を買って、フラワーホテルまで送り届けていただきました。

翌日8月23日は、7時55分ウランバートル出発のため、6時にガナ先生ご夫妻がホテルまでお迎えに来てくださいました。

実際のフライトは約1時間遅れでしたが、成田到着は定刻通り、空の上で簡単に

時間調整ができるものなのだなと思いました。

今回の旅行は、正味3日間の旅行でしたが、アリウナ先生の親子三代、ガナ先生のご家族とお母様の親子三代の家族旅行にご一緒させていただいたような、アウトホームで貴重な体験をさせていただいた旅となりました。

ツェベクマさんをはじめ、アリウナ先生のお母様とガナ先生のお母様からは、混乱の時代を生き抜いてきた強さを感じ、アリウナ先生とガナ先生からは、お母様方から受け継いだ生き抜く強さをもって、日本で生活していく努力を感じますし、アリウナ先生とガナ先生のお嬢さんからは、当たり前のように上手に、日本の中に溶け込んでいる様子ですし、それぞれの親子三代から、モンゴルの時代の変遷を垣間見たような気がしました。

ガナ先生のお話では、モンゴル人は、どんな所にも順応していく適応力があるとのことですが、それは遊牧民族として、どこにでも移動して生活していく資質を、もともと持っているからなのでしょうか。

さらに、モンゴル人は、自然との共生の中で、大地に根ざした生きる強さと生き抜くための努力を惜しまない民族だと思いました。

今、話題となっている「モンゴル力士会」も、もともとはモンゴル力士たちの、日本の相撲界で勝ち抜くための努力の場だったと思いますが、日本の縦割り社会に溶け込む中で、何かひずみができてしまったのかもしれませんが。

思い切って、今回モンゴルを旅行して、モンゴルと遊牧民族のモンゴル人が、さらに好きになりました。

私の課題は、少しでもモンゴル語を習得できるよう、前に進むことです。

言葉がわからなくても、モンゴルを感じ取ることができた旅行でしたので、コミュニケーションがとれれば、もっともっと楽しかったはずです。

努力しようと思いました。